わんわんおなんて言わせない

暇人（暇では無い(´・ω・`)）

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界では、『ジンオウガ』と言う、名前からしてかっこよく、強そうな感じのモンスターがいる。

ところがぎっちょん！プロハンさん達の手に掛かれば出落ちも珍しい事ではない。　おかげでついたあだ名は『わんわんお』。

ーーーもう、わんわんおなんて呼ばせない・・・！

一匹の新たなわんわんおが立ち上がる。そいつの前世は・・・　人間!?

そんなわんわんおのちょっとした奮闘記。

目　次

第1話　「見た目はわんわんお、頭脳は大人？」――――1
第2話　「霊峰はマンションとかで良いのでは」――――7
第3話　「ミツネさんは何でハイスペックなの？」――――13
第4話　「人類の技術って凄いんだね（小並感）」――――18
第5話　「復讐とかする奴って大抵弱いよね」――――24
第6話　「予定が狂うって、よくあること」――――28

第1話　「見た目はわんわんお、頭脳は大人？」

雨が、降っていた。

人々の雑踏が、うるさかった。

鉄の塊が、道を行き交っていた。

小さな命の、はしゃぐ声が聞こえた。

信号が、変わっていた。

トラックが、近づいてきた。

男は気付かず、歩きだした。

大きな音が、なった。

血が、吹き出した。

老人は驚き、杖を落とした。

会社員は、急いで携帯を取り出した。

運転手は転がり落ちるように出て来て、男に駆け寄った。

男は、もうダメだと悟った。

男の魂は、どこかへと消えた。

《現世》→《あの世?》

目を覚ますと、そこは何も無い、一言で言えば『無』の世界だった。

「うっ・・・ つ、たたたた・・・。あれ、生きてる?ハッ、これはまさか死後の世界で、この無限地獄で永遠を味わうのじゃーはっはっは的なアレか!」

「残念ながら違いますね。」

声の主は、天使・・・ ではな・・・ くもない・・・ ともいえない・・・ なんと言うか不安定?な感じの人だった。

天使にせよ悪魔にせよ神にせよ、それぞれのトレードマークになりそうなものが何一つ無い。羽とか、三叉の槍とか、あの輪っかとか・・・。

「ここは転生の間。死んだものが次なる転生を待つための場所です。」

え、転生?まじで?まじのマジで転生なの?

うっは、テンション上がってきた!だっておま、転生だぜ?転生。現実の転生論とか出してる人いたけどマジだったのか・・・。いやー、どうしよ。東方とか行くか?紅魔館の執事とかやってみたいなぁ。家事スキル無駄にあがりそう。あ、ポケモンとかどうよ。厳選派じゃないけど殿堂入りとかしてみたいじゃん。あ、ジャン繋がりで巨人とかどうでしょ。・・・ だめだ、死ぬ気しかしない。何だっけ、あのふぇいと?とか言うの。よく分かんないけど行ってみたいなぁ。モンハン?あんなの無理ゲーに決まってんじゃん(笑)

「あなたにはモンスターハンターの世界に転生して頂きます。」

「・・・ はい?」

いや、私今「無理ゲー（笑）」とか言ってたばっかですやーん。あ、そこのあなた、あなたですよ、画面のとこのあなた。今「ふん、軟弱者めが！」とかそんな感じのこと思ったでしょ！甘いですよ！ゲームじゃ余裕かも知んないけど、リアルに戦うんだよ！そんな○ニバーサ○スタジ○ジャ○ンみたいなハリボテじゃあ無いんだよ！ゲームじゃしてこなかったような事もきっとやって来るんだよ！無理ゲーじゃん！（^・ω・^）

「転生の特典についてですが・・・」
「え、何、特典とか付いてんの？」
「何だ、現代人は皆知ってると思ってました。じゃあ、簡単に説明しますね。」

説明によると、転生では、何かしら特典が貰えて、転生先によって特典の豪華さが変わるらしい。んでもって、モンハンは最上級らしい。ＥＳＴですよＥＳＴ。ｇｏｏｄならｂｅｓｔになるんですよ。これはワンチャンある可能性が微レ存。

「では、転生します。よろしいですか？」
「ああ、頼みますよ。」
「では、素敵な転生ライフをお楽しみください～♪」

あ、やっぱり移動は落ちなんだ。
最後に見たその人は、綺麗だな、と思った。

《転生場所》→《モンハンワールド》

暗い。
暗所恐怖症では無いが、あまり落ち着かない。む、体が上手いこと

動かない。しかもカラのようなものがある。
行動派の皆さんならここでサッと何かしら動きを見せるのだろうが、私は違う。面倒なのだ。こんな時は寝るに限る。障害はきっと時間が解決してくれるはずだ。
私の座右の銘は『果報は寝て待て』である。

《朝?》→《夕方?》

お、ヒビが割れた。そうだ。そのままパキッ、パキッといってしまえ。自分の力で出るなど面倒である。と言うのは建前で、気がついた時にすぐ出れば、敵に見つかる可能性が高い。逆に、こちらは気付かない間にパクリ、なんて事が多いが、それはそれで楽に死ねる。そんな結末を望んでいる訳では無いが。おっと、もう出れるか。さて、私はどんなモンスターなのだろうか。

【主人公】→【ハンター（遺跡平原）】

「あー、卵が食べたいわ。」
「何言ってんだお前。卵なら家にいっぱいあるだろ。」
「ガーグァは飽きたのよー。」
「はぁ・・・。んで?何の卵取りに行くの?」
「んーと、飛竜の卵で。」
「うーわめんどくせえ」
「問答無用。どうせ暇でしょ。レッツゴー。」

私、クレアは大の卵好きである。もちろん卵シンジケートにも入っている。ＴＡ・ＭＡ・ＧＯ!!あの魅力に取り付かれないものはどうかしているわ。
んで、この男は私のチームのメンバー1の暇人ことランバート。面

倒面倒言いながらも一番私のクエストに付いてきてくれる。こいつの玉子焼きは美味い。周りの奴らのとは比べ物にならない。
そんな2人で、今日は飛竜の卵を盗りに行く。先日、知り合いが夫妻のクエストを47分でクリアしたのだ。ドヤッ。て来たから覚えている。凄いけど、ギリギリじゃない・・・。
話が逸れたけど、そんな空になった夫婦の巣の卵を頂戴する。せっかくだから、次は目玉焼きにしようか?なんて会話をしながら、エリア5に乗り込めー。

「なあ、クレア。」
「なに、ランバート。」
「あれ、どういう事?」
「私に聞かれてもねぇ。」

そこには、高さ10センチ、体長30センチほどの小さな生き物がいた。どうやら卵から出てきたようだ。
「あれなんてモンス?」
「知らん。少なくとも此処いらにはいないやつだ。捕まえたら大手柄かもよ。」
「大手柄っ!」
目が輝く。世界にはまだまだギルドが知らないモンスターが多い。それでも、最近はそんな未発見のモンスターも減ってきている。これはやるしか無い。あのちびっこいヤツに恨みはないが、人間の発展の為だ。犠牲になってもらう他ない。

「とりあえず様子見ね。それぞれ攻撃は3回まで。」
「オーケー。んじゃあ行くぞ。」

・・・ こん時上手く行けば良かったんだけどなぁ・・・。

【ハンター（遺跡平原）】→【主人公】

なんと、ジンオウガとは。これじゃあわんわんおもいい所じゃあないか。しかも生まれたてで背も小さい。余計にわんわんおに拍車がかかる。

おお、神よ！最上級の特典とはわんわんおの事なのか！

まさにＯｈ　ｍｙ　Ｇｏｄ！である。これじゃあ瞬殺ではないか。

しかもさっきから殺気（激ウマ）を感じる。

こりゃあさっさと移動しなければ。ジンオウガの住処・・・、霊峰、だっけか。イクゾー。

ってぇ！危ねぇ！早速攻撃が来たよ！

パッと見た感じ、片方は大剣、うわ、ボーンブレイドじゃん。こわいこわい。んで、もう片方・・・、何だあれ？周りに虫が飛んでるけどんな武器あったかな・・・？

俺の知識は３Ｇで止まっているのだ。その後の４？からは知らん。新しい武器でも出たか。お、飛んだ。あ、間違いだわ、跳んだ。あの棒みたいなのを使って跳躍してきた。おおー、遂にモンハンは空に手を出したか。

・・・なんて言っている場合じゃあねぇ。早いとこ逃げねば。幸い様子見っぽいし、チャッチャと行こう、チャッチャと。

後ろで何か言い争ってるが、ここで死ぬ訳には行かぬ。

サラバダー。

第2話　「霊峰はマンションとかで良いのでは」

ああ、どうしたものか。
俺は3ｒｄの物語は知っているからここでアマツさんに会って追い出されることも知ってたけど、この世界のアマツさん何か早とちりし過ぎではないだろうか。
どうやったら会った瞬間
「貴様！あの都に飼い慣らされた新たなモンスターだろう！霊峰の平和を守るため、ここで成敗してくれる！」
とかぬかせるのだろうか。あれか、物語に合わせるためにアマツさんの性格を無理矢理変えまくったのか。そりゃあ性格も歪む。だがそれに対応しなければならない俺の顔も歪む。いや、そもそも俺の顔は歪まないかもしれない。
こうなったら霊峰マンション化計画で何とかしてアマツさんを説得しなければ。よし、イクゾー。

＃＃＃＃＃＃

あ、ダメだわ、アマツさん聞く耳持ってないわ。
「ふん！そんな悪魔の計画など乗りなどせんわ!!この戯け者！今度こそ息の根を止めてくれる！」
とか何とか言ってるし、さっきは十文字アタックしてきたしこれガチだわ。完全に『もうダメだわ。こうなったらどうしようもないわ。』状況です。
あ、ダイソンの予備動作。こりゃあまずい。さっさと退散、退散～。
何か後ろで叫んでるが背に腹はかえられない。
・・・　何かデジャヴ。

《霊峰》→《渓流》

うーむ、渓流はいい所である。
魚も美味い。蜂蜜も美味い。おまけにアマツさんもいない。いやーこの三拍子揃ってたらもう何も言うことないわーハンターとかまじ知らないわー。
何かそれっぽい人影が見えたけどしかもそれ前のとこと同じ人感があったけど絶対違うわーただ単にユクモの木とりにきただけだわー何か武器持ってたけどきっとあれは木を切るための斧だわー絶対にボーンブレイドとかじゃないわー。
・・・。いや、ね？幾ら何でもさ、ハンター来るの早すぎじゃね？って話ですよ。あの、もっとさ、村長さんから『ジャギィ倒して！』とか『アオアシラをやっつけちゃって！』みたいな簡単な依頼を着々とこなしていって、そんで『ジンオウガを追い返して！』的な依頼が来るんじゃないの？何最短ルート通っちゃってんですか？学問と同じでモンハンのストーリーには王道は無いんですよ？分かってます？飛び級とか無いんですよ？
全く仕方ない。こうなったら追い返すしか無いのだろうが、生憎俺はまだ子供なのだ。電気などろくに使えない。したがって、体術に頼るしかないが、体が小さいのでリーチが無い。だって俺の尻尾、敵のボーンブレイドより短いんですよ。
・・・はあ。とにかく、やってやりますかね。

【主人公】→【クレア】

全くもって死にそうである。
あの重たいアロイ装備を着ながら遺跡平原からあのモンスターを追って、この地、ユクモまでやってきたのである。なんと言うか、いざという時の自分の行動力には驚かされるばかりである。何をどうすれば１０何キロもクソ重たい装備を背負って走ろうと思うのか。

何はともあれ、あともう少しであのモンスターと会合出来るのである。体がゾクゾクっという感覚に襲われる。ああ、こんな感覚は始めて大剣を握ったときレベルだ。私の狩猟本能が疼いている。

っといかんいかん。今回の目的はあくまでも捕獲。倒してしまってはいかんのだ。ランバートが本格的に力尽きてしまう前にいざ、出陣ーーー。

【クレア】→【主人公】

２人組が各々の武器を構え走ってくる。

・・・ん？ちょっと待った。武器構えながら走るって、これもしかして３ｒｄじゃなくてフロンティア!?ばやい。これはばやいぞ。俺フロンティアノータッチだし。有料プレイとかマジないわー状態だったし。３ＤＳと同じぐらいないと思ったもん。あ、３Ｇはもちろんｗｉｉ版買ったよ。水中苦手です。はい。

おう、話が逸れた。とにかくまだやられる訳にはいかない。標本なんざ真っ平御免だ。

狩られる前に狩ってやんよ（●，｜）＝????●＝????●シュシュッ

２人組が突っ込んでくる。あのねえ、戦術というものを知らんのかね。軽く尻尾で叩(はた)・・・けない。そうだ、リーチ無いんだった。しゃーね。雷光虫集めるぜ。

この戦いでポイントになるのが、雷光虫の集め方である。ジンオウガと戦ったことがある人は１度は思っただろう。

ーーーこいつ、集めながら動けないのか？

と。

実際、ジンオウガは動かないので格好の的であり、結果、亜種になって大幅強化されている。それでも隙を見計らって攻撃はされるが。

ではどうするか。雷光虫を集めながら、かつ攻撃を受けないように

するには。
ズバリ、《走る》。
やってみたが、うん。我ながらせこい。そしてつおい。普段は止まって、相手が来たら走る。んで溜める。もう溜まる、となれば近付いて放電ドーン。
・・・ゲームでやられたら投げるわ（・・ω・、）
おかげで楽にハンターにダメージを与えられている。あ、ラストの回復薬飲もうとしてる。だが慈悲はない。雷光虫弾喰らえ。あ、味方がかばった。ちくせう。でも今ので両方あと1発で落ちるかな？まあ最期はダイナミックお手で決めよう。いくぜ。
ーーーなんか飛んできた。
ヽ（？∀？）ノ┓L）、Д。）・；ドカッ←こんな感じ
何か→　　これが俺→

いっつ～・・・。てぇ！これあれじゃん！あの、新作のクロスで有名な！あの、えー、あのかっこいい！って有名の！あー、あの、あー・・・。そうだ！ナマミツネ!!あれ？なんか違う感じ。えー、あー、アワミツネ！なんか違うか。えっとー、あ、思い出した！タマミツネだ！大丈夫なのか？こいつ。とりあえず手当しないたぁぁばばばばば。
あばばば。（あっこれ痺れ罠だわ。）
あばばばばば！（痛い痛い！リンチやめて！）
あばばばばば！（まって！これ長くない!?）
バキッ
ふう、やっと壊れた。しかし痛い。何なの？さっきまでの仕返しなの？遠くからリンチしてたから今度は近くから反撃するの？やばい、今度から罠使わないでおこう。使えば便利だけど使われる方はたまったもんじゃないね。
ん、痺れ罠？あ、良いこと思い付いた。これ、地面に電気流せば強くね？上手い具合に水流れてるし。いやー、渓流様様ですな。いくぜ。放電っ。
ヽ（。ω。）ノあばばばばヽ（。ω。）ノ

みたいな感じになってる。いやー、上手くいったね。今のうちにタマミツネ背負って逃げるんだよー。きっと俺の前前前世はサイヤ人の王かアメリカの黒人のスリだな。なんか逃げてばっかだ。

・・・ いや、スリはついて行っただけか？んじゃあ波紋使いの方だな。俺はシーザーの方が好きだけれども。

【渓流（水場）】→【渓流（わんわんおの住処）】

とりあえず薬草いっぱい食べさせたし大丈夫でしょ。どっかのお医者さんもダイジョーブダイジョーブ言ってるし。

とにかく今は回復を待とう。あ、薬草1枚余ってる。ってかカビ生えとる。・・・ まあ食べれるでしょ。

・・・あ、これ眠り草＿（☒ω☒」∠）＿ スヤァ…。

【わんわんお】→【ちょい前のミツネさん】

どういう事だ。なぜ泡が効かない？

相手はミツネ装備では無い。泡沫の舞は発動していないはずだ。なに、メタイだと？んなもの、自分のスキルぐらい熟知しておかなければ。

それよりも相手はどんな能力を使っているのだ。こちらの泡をまるで吸収したかのように見え、かと思えばこちらより鋭い泡を飛ばしてくる。・・・ なんだと？アワアワの実の能力者？あわあわって、こんな？←

ゞ（・ω・、；）ノ三ゞ（（；゛・ω・）ノアワアワ

・・・ 違うのか私と同じアワアワか。そりゃあ強敵だな。なんて言っている場合ではない。こちらは結構まずいのだ。その、なんちゃらの種？だったか。の力は侮れない。こちらが滑らせるはずが、逆に滑らされる。しかも相手は体術を心得ていると来た。さっきから《指銃（しがん）》という名の技を使い、我が身を貫いてくる。これがまた痛いど

ころの話ではない。1度受ければ意識が飛びそうになるほど痛いところを何発も来るのだ。しかもこちらは滑って動かない。こりゃあ勝てる気がしない。早く、逃げーー

グサリ。

ああ、心臓に近いとこをやられた。まずい。血が吹き出る。意識が遠のく。だめだ、死ぬ気しかしない。と言うか死ぬのだろう。相手はもう1発、といった様子で構えている。ああ、世界がスローに見える。走馬灯のようなものも見える。相手が走ってくる。後ろは崖、前には敵。四面楚歌どころでは無い。寧ろあっちは自分が強ければまだ勝機はあるではないか。こっちにはそんなもの微塵もない。今の私には死しか待っているものは無い。さらば、現世よ。来世でまた、会おう。

グサリ。

同時に私のバランスは崩れる。血がさらに吹き出す。痛みはとうに消えた。相手の満足そうな顔が瞳に映る。畜生。来世で覚えておけ。

ーーーそこで、私の意識は、途切れる。

【ちょい前ミツネさん】→【今のミツネさん】

どこだここは。天国にしても地獄にしても殺風景である。そしてここに寝ている雷狼竜・・・ なのか?えらくちびっこい。死んでいる?いや、まさか。恐らく死にかけだった自分を運んでくれたのだろう。つまり、私はまだ生きている。なんと、現世よ。またあったな。

しかし眠い。これは・・・ 眠り草?まさかこいつ、私にこれを食わせたのか。くそう。起きたらタダではおかぬぞ__(☒ω☒」∠)__ スヤァ…。

第3話　「ミツネさんは何でハイスペックなの？」

その日は、とても天気の良い、まさに『晴天』であった。どんなやるべき事があっても、日がな縁側でごろごろしていたい。そう思うような日であった。実際、俺もそうしていた。日当たりの良い高台を見つけ、ジャギィに奮闘する若手ハンターを見ながら、ゆっくりと眠る。たまに霊峰の方を見つめ、天気がいつも通り悪いのを見ると、まだアマツさん出ていってないのか、とため息をつく。

そんな中、ある時ミツネさんに声をかけられる。

ーーー少し、手合わせ願えんかの？

《渓流（昼）》→《渓流（夜）》

夜。

当たりにはハンターや人の気配はせず、たまにちらっと光虫が飛ぶ。川は静かにちょろちょろと流れ、自分の雷光虫が自分の周りを飛び交い、ミツネさんの周りには妖艶に光る泡が舞う。歌人ならここで一曲書いたりするのだろう。そうでなくともずっとここにいたい、そう思うほど綺麗な場所だった。

「なあ、ミツネさん。ガチでやんの？」

「ああ。わしは至極ガチじゃよ。」

「・・・ミツネさんてそういう事言うんだ・・・。」

「それでは、ルールを説明するぞ。と言っても簡単なものだがな。まず・・・」

残念ながら簡単とか言っときながら十分位かかったので、『簡単に』要約すると、

・制限時間は十分。

・どちらかが倒れるか、敗北の意思を示せば終了。

・ハメ技など、卑劣な手で無ければ基本何でもおｋ。

レフェリーはたまたまいたアイルーさんに頼んだ。流れ弾が当たらないといいね（ニッコリ）。

しかし、ガチか・・・。勝てるかな？だってミツネさんだぜ？クロスのＰＶ見たけどあんまし勝てる感じじゃ無かったじゃん？俺ちっさいしさ。まあいいか。うだうだ言ってたら余計に負ける気がする。おっしゃ。やってやんよ。（●，｝）＝????●　＝????●シュシュッ

＃＃＃＃＃＃＃

「みんにゃー！盛り上がってるかにゃー!?」

「「「「「にゃー！」」」」」

・・・どうしてこうなった（・・ω・、）。

いつの間にか観客席が出来ていて、アイルーの団体様御一行が陣取っている。流れ弾当たらないといいね（ニッコリ）。

「んじゃあミツネさん。行きますよ？」

「おう。全力でかかってくるがいいぞよ。」

「では行きますにゃ。ようい・・・ファイッ！にゃ！」

掛け声と同時に飛ぶ。風をきって走り、ミツネさんに飛びかかる。まずは様子見。いつもの飛び込んでドーンで行く。対するミツネさん、不動の構え。余裕、って訳か。そのふざけた幻想をぶち壊す！ドーン！

・・・手応え無し。うーん、ミツネさん回避スキル無駄に高いからなぁ。こりゃあ持久戦になるわ。

1歩。たった一歩下がった瞬間、ミツネさんの猛攻が始まった。初め、特大の泡を飛ばしてきて、それを軽く回って尻尾でいなすと、中からミツネさんがドーン！何とか躱すが、猛攻は止まらない。タックルを躱すと、その慣性を消さずに突っ込んで、あの長い尻尾で叩く。持てる背筋をすべて使って顔面スレスレで躱し、一旦落ち着く、と思った瞬間。

視界が反転する。急な場面の変化に対応出来ず、無残に地面に叩きつけられる。背中に痛みが走る。どうやら足払いならぬ尻尾払いを受けたようだ。グフっ、と苦悶の声を洩らし、急いで立ち上がろうとすると、ミツネさんのバブルこうせん顔負けの泡乱打が飛ぶ。なんとか起き上がり、雷光虫弾で対応するが、何しろあちらは量が多い上に、こちらは生成に時間がかかる。おかげで三つ四つ命中する。中でも一番の痛手は、泡、左目に入った。すごい、痛いです。

こちらの視界の良さに反比例するかの如く、あちらの泡の量は増す。一つ、二つと着実に命中させてくる。1発1発に重みがあり、ダメージがでかい。ハードモードもいい所である。弾幕はまるでルナティック。躱せるわけが無いよォ・・・！こうなるんなら前世でもっと東方やっときゃ良かったかな・・・。

ってまず、油断しtドーン！

メキメキ、と嫌な音が当たりに響く。どうやらミツネさんの渾身の一撃、タックルをモロに鳩尾で喰らったようだ。アイルーの中にはすごい顔をしている者もいる。ああ、痛てぇ・・・。やばい、意識がやばい。あっこれ落ちるかもだわ。くっそ、忘れてた。ゲームはハンターは超人だからくらってもすぐに立ち直ったりしてたけど、これはリアルに痛みが来るんだった。持て、持つんだ、俺。

「ほれほれ、どうした？もう終わりか？おぬしには少し期待しておったのだが、少々期待はずれだったようじゃの。」

「うっせぇ。言ってろ。これからこっちの猛反撃タイムだかんな？」

「ほう、なら少しは楽しめるんじゃな？」

「・・・その余裕そうな表情を苦悶の表情に変えてやんよ！」

いい終えると同時に駆け出す。ただ突っ込むだけでは泡を巧みに使われ、躱されるのは目に見えている。ならば、どうするか。
こんな言葉がある。眼には眼を。歯には歯を。毒には毒を。火には火を。それならこちらがすることは一つである。『泡には泡を。』
ミツネさんは自分の周りに小さな泡を展開させ、自分に攻撃が来るのが分かるようにしている。なら、作戦は決まった。雷光虫弾を生成。ミツネさんの顔面にヒットするよう狙いをつけ、発射。ただしスピードは遅めにする。ここ重要です。発射すると、全速力ではしり、ミツネさんの左前辺りで急停止。すると、泡で滑り、見事にミツネさんの背後をとる。雷光虫弾を打ってからここまでの時間、およそ0.4秒。ここでミツネさんに雷光虫弾がヒットする。が、当然の如く躱される。駄菓子菓子！今回狙うのはこ→こ←である。躱す方向を直感で感じ取り、そこに全力の『お手』を叩き込む。手応えあり…！
これは来たんではなかろうか？このままもう1発おみまいしてーーー

#####

「いたたた…。うーん…　あり？ここどこでっか？」
「どこって…　あんたの巣じゃよ。」
「あれ、ミツネさん。あれ？俺、戦ってて…」
「はあ。何も覚えとらんのか？」
「覚えとらんって…　何をよ？」
「昨日。あんたがようやくわしに一発当てたじゃろ？いきなりお前さんが暴走し出しての。と、言うよりかはお前さんの雷光虫が、の。そこでまずいと思ったわしが、お前さんの後頭部の急所をポカり、んであんたは、バタり。んでアイルーと協力してここまで運んできた。という訳じゃよ。しかし、全く覚えとらんとは、恩知らずな奴じゃのー。」

「雷光虫、暴走・・・。」

全く覚えてないが、とにかく迷惑をかけたようだ。って、後頭部の一撃で倒れる俺って・・・。意外とひ弱なの？しかし、暴走したってことは俺の許容範囲を超える雷光虫が集まったということ。つまり、俺はもっと多くの雷光虫を集められると言うことだ。おおう、テンション上がってきたァ。わっしょいわっしょい。

しかし、毎回暴走していては意味が無い。もっと修行しなければ。いやーでも、昨日の泡を利用したのはよかったとおもったんだけどなー。ミツネさん今見たら無傷っぽいし。もっと筋力もつけなければ。頑張れ、俺。ミツネさんを超える日はそう遠く無い・・・ はずだぞ！

第４話　「人類の技術って凄いんだね（小並感）」

突然ですが、私は今、アイルーの里に来ております。ここで私は、新たな可能性を見つｋ「わー！ジンオウガさんの尻尾滑り台たのしーのニャー！」れも、ミツネさんにあることを言われたのが初まｒ「僕も！僕も滑るのニャ！」・・・。

はあ。こうなるはずじゃあ無かったんだけどね。

話は、およそ三時間前へと遡る・・・。

＃＃＃＃＃＃＃

【渓流（早朝）】

「おぬし、あれじゃろ？俗に言う、〝すらんぷ〟という奴じゃろ？」

きっかけは、ミツネさんのその一言だった。

ミツネさんとの手合わせからおよそ・・・何日だっけ？だめだ、ジンオウガになってから日にちが分からなくなってきた。自分の数少ない人間要素が無くなってしまう。まあこうして人の言葉を理解していることが最大の人間ポイントなんだけどね。

っと、話が逸れた。手合わせから数日後、雷光虫の許容量を増やすにはどうすればいいか。雷光虫弾を強くするにはどうすれば良いのかと悩み、挙句の果てに諦めて睡眠学習に手を出そうかとしていた時、ミツネさんにそう言われたのであった。

「んー、まあそんな感じなのかな。なんて言うか、どこか違う気もするけど。」

「まあ、大体あっとるんじゃからいいじゃろ。」

「んで？そのスランプ中の私に何か用でもあるんで？」

「おっとそうじゃ、忘れるところじゃった。」

・・・いや、今のポイントのどこで忘れかけてたんだ。このミツネさ

ん、そこそこ年配者だとは思ってたけど、ここまで深刻なのか。アルツハイマーかな？こりゃあ将来も一緒に暮らしてくなら面倒くさくなりそうだ。
「いや、わしもな、年配者としておぬしに道を示してやろうと思ってな。」
・・・ え？なんか急に凄い人っぽくなって来たんだけど。あ、人じゃないか。凄いモンスターっぽくなってきた。って、そんなこと言ってる場合じゃない。だってね？今の今まで結構老化進んでんじゃーんとか思ってたんですよ？そんな考え吹き飛ぶレベルですよ。いやー、ミツネさん侮ってました。まあれだもんね。手合わせの時分かったけど、ミツネさん凄い強かったもんね。
「・・・ おぬし、結構酷いこと考えてたじゃろ。まあいい。それで、示す道じゃが、二つなの？手っ取り早く、一つに絞ってくれてあったら嬉しいんですけど。」
「それじゃあおぬしに示す道が無くなってしまって、意味が無くなるじゃろうが。」
「あぁらほんと。ミツネさんがせっかく選ばせてくれるって言ってるのに意味なくなるもんね。」
「ちゃんとそういう所考えて欲しいの。・・・ っと、おぬしと話すと話がどんどん逸れていく気がするの。さて、まず一つ目じゃが、《このまま1人で延々と思考を巡らせ、1人で生成していく。》じゃ。まあ、簡単な事じゃな。実際におぬしはついさっきまでやっておったのだし。・・・ 本当に考えておったのかは知らんが深くは聞かんよ。」
「ア、ハイ。ソレガイイトオモイマス。ハイ。」
「・・・ おぬし、本当にわかりやすいのぉ。そして二つ目じゃが、《外へと知識を求め、視野を広げる。》じゃ。」
「ふーん・・・。」
「さあ、道を示したものとして聞こう。と言っても答えは分かりきってるがの。さて、おぬしは前者と後者、どちらを選ぶ？」
「・・・ そんなの、決まってるじゃん。もちろん、俺が選ぶのはーーー」

＃＃＃＃＃＃

んで、今に至る。

アイルーたちは仕事があるらしく、ある程度遊ぶと帰っていった。しかし、ミツネさんとの手合わせで面が割れているとはいえモンスターを簡単に入れてしまうような、そんな警備で大丈夫か？（イケボ）

「大丈夫ニャ、問題ないニャ。」

「おっと、あなたが長老さん？」

「いかにも、ニャ。して、本日はどのようなご要件でいらっしゃったのニャ？」

「ああ、今のユクモの村の技術とかを教えてもらおうと思ってね。」

「技術、ですかニャ。ふむ・・・ それでは、竹とんぼなんていかがでしょうかニャ？」

ズコーッ。いや、あのね？そういうんじゃ無くてさ。こう、もっと、なんて言うか・・・。ああ説明しづらい。竹とんぼなんて誰でも知ってるじゃないですか。んなもの教えられてもこっちは困るんですよ・・・。

「ふむ、違いましたかニャ。・・・ それでは、水鉄砲なんていかがですかニャ？ユクモの木から作った一級品ですニャ。」

ほう、水鉄砲とな。

少なくともさっきの竹とんぼよりは参考になるだろう。さらば、竹とんぼ。お前の尊い犠牲は新たな可能性を見つけたぞ。あんまり尊くないけど。

って！水鉄砲がいい感じだったからその後に来るのにも期待してたけど、結局紹介されたのが全く参考にならないのなんの。独楽に面子、双六・・・。私はね！古き良き日本の遊びを学びに来たわけじゃ無いんですよ！全く、ユクモはそんなに進んで無いのか・・・。あれ？確かゲーム内でも近代的なものは全く無いと言っても過言では無かった気が・・・。うーむ、外に知識を求めると言っても、自分の周りには知識

が少なすぎる。あ、そうだ。ミツネさんに自分は転生者って言ってなかったわ。そりゃあ俺が悪いわ。仕方ないね。

んじゃ、しゃーない。とにかく帰るか。水鉄砲って言う発想に行き着けただけでかい収穫だったな。うんうん。

【渓流（夜）】

…溜めて…、溜めて…、溜めて……、

放つっ！　　ドーン！

…うむ、我ながらいい出来である。

アイルーの里から帰った後、あの水鉄砲を何とか利用出来ないかと考えた結果、水鉄砲の構造自体を真似することにした。最近の現世の方の水鉄砲は、本物の銃に似せて作ってあるが、この時代の水鉄砲は至ってシンプルなデザインである。細い筒に水を入れ、水が漏れないようにしながらもう1本の棒を挿し、圧力で水を飛ばす。水鉄砲は、先端部分の穴が小さければ小さいほどよく飛び、威力も上がる。これを雷光虫弾でやるだけである。

やり方は簡単。

①？いつものように雷光虫を溜める。

②？出来るだけ形状を細くする。

③？思い切り飛ばす。

たったのスリーステップで今までよりも高威力の雷光虫弾を放つことが出来る。命中率は少し落ちるが、もともと射的は得意な方である。威力も射程もスピードも文句無し。とりあえず雷光虫弾の問題は解決である。

そう、まだまだ問題は山積みなのである。

体が小さいことによるリーチの短さ。

雷光虫の許容量増幅。

そして何よりも根本的な強さ。
これから全部の問題と向き合っていかなければならないと考えると、気が滅入ってしまう。まあ、これは自分自身が望んだからやるのだ。時間はまだまだあるし、これと言ってやらなければならないということも無い。
何時かミツネさんを倒し、アマツさんを倒して霊峰を取り戻すその日まで、前進あるのみである。
頑張れ、俺。明日は近いぞ。
そうと決まれば、雷光虫弾も完成したんだし、早いとこ寝てしまうに限る。現世にいた頃は会社が忙しくて全く出来なかった早寝を欠かさずすると心に決めているのだ。
明日も頑張ｒ―（☒ω☒」∠）―　スヤァ…

【渓流（朝）】

ふあぁ…。
早寝を欠かさずしているとはいえ、朝には弱い。会社員体質はとっくの前に抜けてしまったのだ。
とは言っても寝床の崖から飛び降りるのはもう慣れた。毎回こけてちゃ笑えないからね。
ん～…！よし！今日も1日、頑張…　ろ…？

目の前に映っている、寝転がったままのミツネさん。ぱっと見れば、まだ寝ているだけにも見える。しかし、ミツネさんの背中から突き出ているのは…。
ーーーきっちりと綺麗に研がれた、大剣…。
「あ、ああ…。」
ミツネさんの周りには、もう、泡は浮いていない。血も、1滴も出ていない。
目の前が真っ暗になり、倒れてしまった。

そこで記憶は、途切れている・・・。

第５話　「復讐とかする奴って大抵弱いよね」

ーーーミツネさんが、死んだ。

その事実は、自分の胸に深く突き刺さった。

実際に、ミツネさんの死体を見た時、ショックと同時に、決して少なくはない精神的なダメージを受けた。共に過ごしていたのはわずか三ヶ月程ではあったが、それでもミツネさんは家族のようなものだったのだ。正直、言葉では表せない程辛い。

ああ、今の自分はどんな顔をしているのだろう。生気もほとんど感じられないような残念な顔をしているだろうか。いや、きっとしているのだろう。現に周りのジャギィ達は少し困ったような顔をしてから去っていった。今すぐ鏡を見て、残念な顔を見てみたい。きっといつもの自分ならふっ、と鼻で笑うのだろう。

これからどうしようか。今は何もやる気が起きない。メロスが途中で悪い夢を見たように、もう生きていくのもどうでもいい、面倒臭いと思ってしまう。リーチの短さを補うための体術？雷光虫の許容量を増やす？笑わせてくれる。現世でも、親族が亡くなるところに遭遇した事は無く、大切な人を失うというショックが強すぎるのだ。

今、チラリとハンターの影が見えた気がする。そうだ、一層の事、殺されてしまうという手もあるか。死んだら死んだでまた転生出来るのかも知れない。そうすれば、先客が居て行けなかった東方ｐｒｏｊｅｃｔの世界やポケモンの世界、マリオの世界。そんな違う世界に行けるのか。そんな楽しい世界に行けるのか。そう思えば思うほど死への憧れは強くなっていく。

１歩ずつ、ハンターに近づく。ドクン、と心臓がはねる音がする。１歩、また１歩進む。ドク、ドク、と、鼓動は速くなっていく。ああ、もうすぐ死ねる。このことを忘れる事が出来る。もうすぐ、もうすぐ・・・。

コン、と何かが足に当たった。反射的に足元を見る。ミツネさんの

顔だ。その瞬間、ハッと、気づき、歩みを止めた。そうだ。自分は何をしているんだ。こんな所で死ねば、一番悲しむのは誰か。他でもない、ミツネさんではないか。天国があるならば、きっとミツネさんは自分の行動を見ていて、そうして欲しくはないと願っているだろう。ミツネさんの死を乗り越えて、1歩、大きく成長するのが今の最善の行動では無いのか。もし死んで、ミツネさんにあっても、そんな恩知らずなやつに育てた覚えは無い！と一喝されてこちらが（^・ω・^）ショボーンとなっていしまうのがオチだ。それならば、今はただ、がむしゃらにでも頑張るしかないのだ。頑張れ、強くなるんだ、俺。

＃＃＃＃＃＃

ミツネさんの亡骸は、アイルーたちと協力して手厚く葬った。墓にはきちんとミツネさんの好きだったスズランの花を添えておいた。きっとミツネさんもどこかでこれを見ていて、ニッコリと微笑んでくれているだろう。これでミツネさんのことをズルズルと引きずったままでいるのは終わり。これからは1人で頑張っていくのだ。俺たち（1人）の冒険はこれからだ！

と、言いたいところなんだけれども。見たところ、先ほどのハンターとミツネさんを殺したハンターは同一人物では無い。なのにこんな辺境の地を歩き回っているということは、おそらくミツネさんとハンターは相打ちになり、その家族だか知り合いだかギルドのメンバーだかが復讐に燃えてやって来た、という所だろう。せっかくミツネさんを埋葬したのにここを荒らされるわけにはいかない。それじゃあ、1丁やりますかね。ミツネさんとハンターの、弔い合戦とやらを。

＃＃＃＃＃＃＃

どうやら、向こうもこちらに気付いたようだ。そっぽを向いて行こうとしたが、そうなることは想定済で、アイルーを1匹向かわせており、〝あいつとミツネさんがあのハンターさんを殺したのニャー！〟的なことを言っておいてもらう。すると、きっとあいつは俺を攻撃しに来るだろう。それを見事に返り討ちにする。と言うのが本来のシナリオ。だが、到底上手くいくとは思っていない。弱いヤツがノコノコと敵討ちだ～的な感じで乗り込んでくるはずもないし、そもそも弱ければここまでたどり着くこと自体出来ないだろう。きっと今回の戦いは前のように上手くは行かない。苦戦は必至だ。でも、ここまで来た以上、やるしか無いのだ。改良した雷光虫弾を攻撃の主軸にして、今回もやってやんよ（っ・д・）≡⊃）３。）∴シュッ

初めに仕掛けてきたのはハンター。武器は・・・ランスか。なんだ。てっきりやられたハンターと同じ大剣だと思っていた。速い動きで撹乱させれば大丈夫だと思っていたのだが。まあ、腹部に潜り込まれれば怖いが、それさえさせなければ比較的楽な相手の部類に入る・・・と思いたい。何せ俺はフロンティアとかクロスとかは知らない。従って、新モーションとかが出ているかもしれないのだ。そのせいで滅多打ちにされるのが一番こわい。

・・・っと、危なかった。間一髪で武器出し攻撃を避ける。アレを避けなければその後の上段突きも二連続で当たってしまい、とても痛い（切実）のだ。アレのせいで何度切り傷を作ったことか。ってまたか！回避からのコンボをすぐに繋げられるのがランスの強みだ。１度当たれば何度も当たる。つまりどんな攻撃も一発目を避けなければ多大なダメージをうける。これ、重要です。対策は考えてはいるが、突進なんか食らった日にゃあ・・・考えたくも無い。

さて、そろそろこちらからも反撃していかなければ、ただのサンドバッグである。取り敢えず体術で仕掛けてみる。一コンボ、二コンボ、三コンボ、四コンボと、一発一発は弱くてもコンボを繋げることが重要である。普通、ジンオウガの一撃は攻撃にもよるが凄く重い。だが、この体では小さいため、普通のジンオウガとは違う方法で攻め

ていくことが重要なのだ。どうやら、一、二、三発目は防がれたが、四発目はヒットしたようだ。この隙を逃さず、改良型雷光虫弾と雷光虫弾を叩き込む。この二種類では速度も異なるため、非常に避けづらい。お、一発目ヒットした後飛んでいく時にもう一発当たった。ラッキー。

どうやら相手はミツネさんが生きていて、かつ瀕死だと思っていたのだろうか、軽装で来ている。回復薬も持ってきていないようだ。まあ、もしミツネさんが生きててもあれぐらいならちゃちゃっと倒しちゃうんだろうけど。そう考えると、こちらもさっさと倒してしまわないと。

少し相手から離れ、突進を誘発させる。お、来た来た～。遂にやけになったか。プロハンじゃ無くてもここで突進は無いだろ。まあ俺が誘発させたんだけど。それでもこのチャンスを逃すわけには行かない。ギリギリまで相手を引き付け引き付け・・・、ホッ、と一、二、センチの差で避け、尻尾を横から叩き込む。すると、案の定相手は吹っ飛び、ランスも吹っ飛んだ後に地面に突き刺さる。吹っ飛んだ相手はそこらの岩に当たり、グフっ、と呻き声を上げ、落ちる。どうやら満身創痍のようだ。まあ、ここで起き上がられても困るので、ダメ押しで落ちているランスを踏みつけ、折り、遠吠えをする。おお、ビビっとるビビっとる。あ、ネコタクが来た。止めはさせないか。まあい。返り討ちという当初の目的は達成したのだ。

ふう、やはり今までで一番疲れた。状況だけ見ればすぐに終わったように見えるが、相手の攻撃も激しく、いくつか傷を負ってしまった。まあ、これぐらいで済んでいるのもミツネさんとの特訓の成果だろう。これでミツネさんへの未練も無い。あ、そうだ。天空山に行こう、天空山。あそこは高低差が激しいし、周りの敵もつよい。いい修行場になるだろう。そうと決まれば、さっそくいくぞー。さらば、渓流。また来る時は格段に強くなって帰って来るだろう。

・・・ 俺達の戦いは、これからだ！

第6話　「予定が狂うって、よくあること」

俺は、ミツネさんの死を乗り越えて、新天地、『天空山』を目指して足を進めていた。そこで修行して、強くなるのだ。しっかし修行とか、前世じゃあ絶対面倒くさがってやらなかっただろうなぁ・・・。

んで、ようやく渓流を出て、野を越え山越え谷越えて。やっとの思いで天空山に着いたと思うと・・・。

ーーーそこは、見渡す限りの砂原ーーー

・・・／（＾ｏ＾）／ナンテコッタイ。

＃＃＃＃＃＃

しばらく放心状態だったが、こうしちゃあいられない。俺は天空山を目指さなければならないのだ。すぐに出発しよう。そうしよう。

・・・あれ、ここ、どこだ？

あ、画面の前の君。目、逸らしただろ。君だよ、君。君さ、今、「迷うのはっやｗｗｗくっそわろｗｗｗ」

とか思っただろ。

大丈夫。隠さなくてもいいよ。俺も思ったから。

まあ、一つ言い訳をするとすれば、地図、無いんですよ。原作と地形、ちょっと違うんですよ。つまりどうなるか？

・・・迷うんですよぉ（ネットリ）。

とまあ残念な言い訳は置いておいて。どうしましょ。闇雲に動けば絶対ひどい結果が待ってるし、かと言ってここに居りゃあ格好の的である。早いとこ移動しないと、ハプルさんあたりが食べに来る。

・・・あ、遠くで振動の音が聞こえる。ドドドド、って感じの。それがどういう事かと言うと。先ほど挙げた、ハプルさんが迫ってきているということでして。さらにそれがどういう事かと言うと。今、結構

やばい状況でして。さらにさらにそれがどういう事かと言うと。このままだと食べられてしまうということでして。

…うーむ、仕方が無い。ここは、伝家の宝刀を抜くしかない。よし、いくぜ！これが俺の最終手段！

ズバリ！『逃げる』!!

はっはっは！逃ぃーげるんだよぉー！ミツネさぁーん！

これならば戦闘を避け、かつ安全に生きることが出来る。『逃げる』。ああ、なんて素晴らしい響き。この間、シャボン玉の方が好きと言ったな。あれは嘘だ。ジョセフさんまじ神っす。

しばらく走り続けて振り向くと、どうやら撒けたようだ。ああ、初めての砂漠でこれか。先が思いやられるな。なんてことを考えながら前を向くと。

整った綺麗な顔立ち。美しい黒い長髪。ずっと見ていれば吸い込まれてしまいそうな双眸。丁寧に整備されてあるナルガ装備。それを完璧に着こなすすらっとした身体。背中からチラリと見えているのは、おそらく双剣。

…つまり、ハンターだ。紛うことなきハンターだ。

ああ、これはきっとあれか。神さまの気の利かないジョークか。それとも蜃気楼か。はたまたハプルさんから逃げることに疲れて、それによって幻影でも見ているのか。

正直、何でもいい。ただ、夢かなにかであって欲しい。だって何かあの人、『私強いですよオーラ』をガンガンに出してきてるんですもん。ガン飛ばしてきますもん。近くに血塗れのデルクス何匹か倒れてるし。あれもう絶対女の子じゃ無いでしょ。阿修羅の化身か何かでしょ。

あーもう嫌だ。せっかくハプルさんから逃げてきたってのにまた逃げなきゃならんのか。はあ。砂漠なんて二度とくるか。忌々しい禁忌の地として覚えておこ……っ！

咄嗟にバックジャンプで回避する。しかし、息付く暇もなく接近し、連続攻撃を仕掛けてくる。こういう時はハンター側の気持ちになって考えるのが良い。無闇に攻撃を仕掛ければ、相手の動きに翻弄され、手痛いしっぺ返しを喰らうのがオチである。ならばどうするか。相手の動きを見るのだ。

見て、見て、見続ける。そして相手の動きを完全に見切った時、ようやく反撃を仕掛ける。それが俺のプレイスタイルだった。

が。なんだこの子。ジンオウガ慣れした動きで逆にこちらが翻弄される。お手の時は反対方向にまわる。回転ジャンプは少し離れ、飛んだ瞬間に近づく。そうした華麗な動きによって、時が経てば経つほどただただ徒にこちらのダメージが増えていく。何か。何か手は無いか。この戦局をひっくり返せるような手は。

・・・ッ！・・・グフッ・・・・・・ う、ああ、また俺の悪い癖だ。戦いの途中だというのに考え込み、相手から手痛い一撃を喰らう。胸に2本の傷が入り、血が吹き出る。まずい、本気でまずい。

仕方ない、一旦距離をとろう。そう考え、バックステップをする。・・・ それが、運命の分かれ道だった。

目の前で、鮮血が吹き出す。砂埃が舞う。視界が悪くなる。その中でも、はっきりと見えるのは・・・

ーーー宙を舞う、1匹の巨大なハプルボッカーーー

ハプルボッカは宙を舞った後、悠々と砂原を泳いでいった。

・・・ 砂埃が、晴れた。

影が見えた。

先ほどのハンターが倒れていた。

左腕が肘から無くなっている。

ドクドクと血が流れ出る。

ナルガ装備が血に染まる。

ゲホッ、と、血反吐を吐く。

いてもたってもいられず、俺は、駆け出した。

俺の中の負の感情が話しかけてくる。
何故助けようとする？何故手を貸す？あいつはついさっきまでお前を本気で殺そうとしていたんだぞ？
戦っている時、あいつの目を見なかったのか？あの目には明確なる殺意が宿っていたぞ？『殺す』の二文字だけが浮かんでいたんだぞ？
戦っている時、あいつの太刀筋を見なかったのか？あの太刀筋は相当に鍛えられたものだったぞ？モンスターを殺すために鍛え上げられたのだぞ？
なのに、なぜ走る？ミツネさんの事を忘れたわけでは無かろう？ミツネさんは人間に、人間の都合で殺されたのだぞ？それなのに、何故あんな奴を助けようとする？左腕が無くなったことに同情しているのか？あんなもの、避けなかったあちらが悪い。こちらには何の責任もありやしないじゃないか。
そうだ。一層の事、こちらから止めを刺してやればいい。もし今助けたとしても、片腕を失った状態ではハンターとしての活動は続けられない。ろくな収入も無く、苦しい生活を強いられるだろう。それならば、今この場で殺してやった方があいつの為なんじゃ無いのか？殺したやった方が楽になるんじゃないのか？あいつを助けたいんじゃ無いのか？

・・・うるさい。
そんな事、分かりきっている。
本気でかかってきたことも分かっている。左腕を失ったことに対しては同情している部分もある。とどめを刺してやった方が良いんじゃないかと思うところもある。ミツネさんの事を決して忘れたわけでは無い。
だが、そんなことは関係ない。殺す殺されるの関係はこの世界では当たり前なのだ。たくさんの命が生まれ、そして簡単に散っていくのだ。それはモンスターも人間も同じ。そんな中のたった一つの命など、ちっぽけなものだろう。それでも、こちらの責任で一つの命の運命を狂わせる訳にはいかない。こちらの勝手な意思で一つの命を終

わらせる訳にはいかない。
だから、助けるのだ。
偽善？お人好し？押し付けがましい？そんなもの知らん。ただ俺が正しいと思った事を行動に移していくだけだ。相手が助けて欲しいと思っていなくとも、それはそれでいい。死にたいと思っていたのなら、目が覚めてから自殺すればいい。
俺がそうしたいと思ったからそうする。簡単なことだ。彼女のことを知りたいという気持ちもあるのだ。とにかく今は彼女の治療に専念するのだ。
もう、負の感情は話しかけては来なかった。来るだけきて、帰りは勝手に帰っていくとは、全く礼儀の一つもあったもんじゃない。自分の感情に礼儀なんかあったらそれはそれで怖いが。ふう。まあハンターの応急処置も完了したし、もう後は巣に運ぶだけ…　で……あぁ。

……　砂漠に巣、無いじゃん…。